作　品　集

2023
（令和５年度）

令和５年度家族ふれあい大賞第27回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」
【家族ふれあい大賞　京都府知事賞】受賞作品
「おじいちゃんちで、スモモ狩り」
京田辺市立草内小学校６年　村上　穂乃歌さん

小学生対象

令和５年度家族ふれあい大賞
第27回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」

主催/京都府　京都府教育委員会（公社）京都府青少年育成協会

中学生対象

第45回「少年の主張京都府大会」

主催/（公社）京都府青少年育成協会　京都府PTA協議会
京都市PTA連絡協議会（独）国立青少年教育振興機構

公益社団法人　京都府青少年育成協会

≪京都府青少年健全育成府民運動スローガン≫　気づいてる？　あなたのまわりの　あたたかさ

はじめに

（公社）京都府青少年育成協会では、明るい家庭づくりや青少年の豊かな心を育むため、小学生を対象とした「家族ふれあい大賞」・「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」～「明るい家庭づくり」運動の普及啓発事業～、中学生を対象とした「少年の主張京都府大会」の二つの事業を行っています。

令和五年度家族ふれあい大賞・第二十七回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」は、京都府と京都府教育委員会が令和二年度まで実施してこられた家族ふれあい大賞（絵画部門・写真部門）事業と当協会が実施してきました「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」事業を令和三年度から一つの事業に統合し、小学生から見た家族や家庭内での微笑ましいふれあいを絵に表現することを通して、子どもたちの健やかな成長にとって家庭の役割の大切さを再認識することを目的として、京都府、京都府教育委員会と当協会の共催で実施しています。本年度は、一一一校・七九六作品の心温まる絵画の応募をいただき、知事賞には、村上穂乃歌さん（京田辺市立草内小学校六年生）の作品が選ばれました。入賞された作品二十三点及び佳作三十四点による入賞作品展を令和六年三月から府内二十六箇所で開催します。

第四十五回「少年の主張京都府大会」は、人格を形成する上で重要な時期にある中学生が、日常生活の中で感じていることや考えていることなどを自分の言葉でまとめ、それを「少年の主張」として広く訴える機会を設け、社会の一員としての自覚と行動を促していくことを目的として、京都府ＰＴＡ協議会、京都市ＰＴＡ連絡協議会、（独）国立青少年教育振興機構の共催で実施しました。本年度は、三十九校・七〇四〇編の素晴らしい作文の応募をいただき、事前の審査委員会（第一次・第二次）で入選十五編と佳作三十七編を選出しました。入選の十五名が令和五年九月二十三日に聞法会館で開催した京都府大会において主張を発表し、各賞を決定しました。

京都府大会で京都府知事賞に輝いたアブドゥル フセイン・ナジュマさん（相楽東部広域連合立笠置中学校三年生）を京都府代表として、全国大会候補者に推薦し、中部・近畿ブロック代表として、第四五回「少年の主張全国大会」～わたしの主張２０２４～（於／東京）で主張を発表し、国立青少年教育振興機構奨励賞を受賞されました。

御応募いただいた小学生・中学生の皆さんをはじめ、事業の実施に御支援・御協力をいただきました学校や保護者の皆様並びに関係機関・団体の皆様、さらには熱心に作品の審査をしていただきました審査委員の皆様方に心から感謝とお礼を申し上げます。

この冊子では、それぞれの事業で入賞された作品を紹介しております。御高覧いただき、小学生の抱く家庭の温かさ、中学生が日頃感じていることや考えていることをそれぞれの作品から感じ取っていただければ幸いです。

そして、これらの事業が応募いただいた皆さんの心の成長の一助となりますことを念願いたしますとともに、取組の裾野が広がり、青少年の健全育成の輪が一層広がっていくことを期待します。

令和六年二月

公益社団法人京都府青少年育成協会
会長　上田　静男

目次

令和五年度「家族ふれあい大賞」
第二十七回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」

◇概　要 …… 2
◇入賞者、佳作者一覧 …… 3
◇入賞作品 …… 4
◇講　評 …… 10

第四十五回「少年の主張京都府大会」

◇概　要 …… 11
◇入賞者、佳作者一覧 …… 12
◇入賞作文 …… 13
◇講　評 …… 28
◇第四十五回「少年の主張全国大会」内閣総理大臣賞　受賞作文

令和５年度「家族ふれあい大賞」
第27回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」
～「明るい家庭づくり」運動の普及啓発事業～概　要

１　趣旨

「子育て環境日本一」の実現に向け、「明るい家庭づくり」運動の普及啓発など、京都全体の気運を醸成するため、家庭内での微笑ましいふれあいを絵画や写真に表現することを通して、子どもたちの健やかな成長にとって家庭の役割の大切さを再認識するとともに、子育て応援のメッセージを伝える取組として、作品の募集・発信を行います。

２　主催　京都府、京都府教育委員会、公益社団法人京都府青少年育成協会

３　後援　京都市・京都市教育委員会・京都府市町村教育委員会連合会・京都府小学校校長会・京都市小学校長会・京都府私立小学校連合会・京都新聞・朝日新聞京都総局・毎日新聞社京都支局・読売新聞京都総局・産経新聞社京都総局・日本経済新聞社京都支社　・NHK京都放送局・KBS京都・エフエム京都(順不同)

４　作品募集（絵画部門のみ掲載）

（１）題材　　親子や家庭におけるほほえましい雰囲気等を表現したもの。「画題（タイトル）」必要。
（２）対象　　京都府内の小学校及び特別支援学校小学部に在籍している児童。
（３）大きさ　　四つ切（38cm×54cm）、横書き
（４）画材等　　自由
（５）厚さ　　作品は画面から3mm以内であれば盛り上げ、貼り付けを可。
（６）募集締切　　令和５年９月11日（月）（当日消印有効）
（７）応募方法　　①必要事項を記入した所定の「応募票」（＊1）を作品裏面にのりづけして、各学校で取りまとめて、所定の「応募者名簿」（＊2）を添付の上、京都府青少年育成協会事務局へ送付。
②個人の方は、直接京都府青少年育成協会事務局へ送付。
＊1「応募票」及び＊2「応募者名簿」は協会ホームページからダウンロードすること。また、絵画の応募は一人1作品で未発表、自作のものに限る。【HP　http://www.kyoto-seishonen.or.jp/】

５　審査及び入賞作品等

（１）入賞作品等

【家族ふれあい大賞/3点】
京都府知事賞　京都府教育委員会教育長賞　京都府青少年育成協会会長賞　/各１点

【家庭の日賞/6点】
京都市長賞　京都市教育長賞　京都府市町村教育委員会連合会会長賞　京都府小学校校長会会長賞
京都市小学校長会会長賞　京都府私立小学校連合会会長賞　/各１点

【まいにちがたからもの賞/6点】
毎日新聞社賞　読売新聞社賞　産経新聞社賞　日本経済新聞社京都支社賞　NHK京都放送局賞　エフエム京都賞　/各１点

【優秀賞/8点】
【佳作/34点】

（２）審査　　審査委員会で入賞作品及び佳作を決定した。

（３）①審査委員会審査委員（50音順・敬称略）
上田　静男（委員長）
岩崎　宏紀　寺町　麗子　藤田　健一　二宮　靖男　野田　千幸　山下　英孝

②最終審査委員会審査委員（50音順・敬称略）
赤松　玉女（委員長）
作道　雄　水野　哲雄　永田　紅

６　表彰

令和６年２月23日（金・祝）、京都ガーデンパレス「葵」において、入賞者（個別賞）の表彰を行い、会場内において入賞作品の展示を行います。

７　入賞作品展の開催

京都府内27箇所で絵画入賞作品展を開催します。

８　その他

（１）応募者には、参加賞を進呈します。
（２）入賞作品は、入賞作品等の巡回展示で掲示するほか作品集、明るい家庭づくり運動啓発カレンダー、啓発資料等に活用するとともに、協会HPに掲載します。（作品の活用時に、作品の画題及び学校名・学年・氏名を記載します。）
（３）入賞作品の出版権は、（公社）京都府青少年育成協会に帰属します。

令和5年度「家族ふれあい大賞」
第27回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」

入賞者・佳作者一覧

入賞作品は、（公社）京都府青少年育成協会の HP からご覧いただけます。
URL http://www.kyoto-seishonen.or.jp/

入賞者

賞	タイトル	氏 名	学校・学年
＜家族ふれあい大賞＞			
京都府知事賞	おじいちゃんちで、スモモ狩り	村 上 穂乃歌	京田辺市立草内小学校６年
京都府教育委員会教育長賞	お父さんの背中にのって	今 西 栗 子	宇治田原町立宇治田原小学校１年
京都府青少年育成協会会長賞	かぞくみんなとピクニック	飯 田 花 帆	京都市立正親小学校２年
＜「家庭の日」賞＞			
京都市長賞	出産おめでとう	髙 井 蘭	京都市立御所南小学校３年
京都市教育長賞	かたたたき	吉 田 葉 七	京都市立伏見板橋小学校５年
京都府市町村教育委員会連合会会長賞	家族だんご	仲 田 尊 亮	木津川市立高の原小学校３年
京都府小学校校長会会長賞	おいしい野菜がたくさんとれた！	渡 邉 水 翔	京田辺市立田辺小学校４年
京都市小学校長会会長賞	大好きな妹の七五三参りの日	飯 田 直 央	京都市立正親小学校５年
京都府私立小学校連合会会長賞	ちちのおたんじょうび	城 戸 紅 葉	京都女子大学附属小学校１年
＜まいにちがたからもの賞＞			
毎日新聞社賞	きれいな花火	川 嶋 将 生	木津川市立相楽台小学校３年
読売新聞社賞	大好きなプール	中 嶋 秋 穂	木津川市立南加茂台小学校２年
産経新聞社賞	はるとおいかけっこ	河 邉 純 羽	京都市立花園小学校３年
日本経済新聞社京都支社賞	家族６人で記念写真	内 藤 結 葵	京田辺市立三山木小学校２年
NHK 京都放送局賞	かんびょうしてくれる母の様子	小 濱 優 依	南丹市立八木東小学校４年
エフエム京都賞	かぞくでキャンプ	楠 田 結 菜	木津川市立城山台小学校２年
＜優秀賞＞（順不同）			
優秀賞	家族の音楽会	張 田 知華子	長岡京市立神足小学校３年
優秀賞	大好きな本を家族のみんなに！！	前 田 泰 佑	城陽市立青谷小学校１年
優秀賞	カニとり	黒 田 英 嗣	木津川市立城山台小学校1年
優秀賞	みんなで入ると楽しいお風ろ	鐘ケ江 真 弥	木津川市立州見台小学校２年
優秀賞	ばあちゃんのスイカまってたよ	小 川 瑞 貴	木津川市立木津小学校２年
優秀賞	楽しいクリスマス	奥 田 翼 玖	精華町立精北小学校２年
優秀賞	かぞくとはなび	久 保 怜 也	相楽東部広域連合立和束小学校1年
優秀賞	応援するって楽しいね！	山 口 蒼 衣	舞鶴市立新舞鶴小学校３年

佳作者（順不同）

氏名	学校・学年	氏 名	学校・学年
片山 怜	京都市立太秦小学校５年	大角 向葵	宇治田原町立田原小学校２年
竹若あおい	京都市立凌風小学校４年	蒲原 光	宇治田原町立宇治田原小学校１年
山根 光生	京都市立百々小学校３年	吉岡 治佳	精華町立山田荘小学校２年
代田 眞子	京都市立常磐野小学校３年	稲子 杏	精華町立東光小学校１年
松山 朋加	京都市立西院小学校１年	柚木 恵茉	相楽東部広域連合立和束小学校１年
白藤 優芽	京都市立錦林小学校３年	西羅 友翔	相楽東部広域連合立南山城小学校２年
田中 京吾	京都市立北白川小学校４年	森川日菜乃	亀岡市立保津小学校１年
井上 栞里	京都市立鏡山小学校３年	中澤 藍衣	亀岡市立つつじケ丘小学校４年
松田 埜希	京都市立嵐山東小学校４年	大石早智花	南丹市立園部小学校５年
丸山湊太郎	向日市立第4向陽小学校２年	米原亜緒依	綾部市立物部小学校３年
重松 愛裕	宇治市立北槇島小学校４年	大槻 正俊	綾部市立西八田小学校４年
竹内 優菜	宇治市立大久保小学校３年	末次 彩夏	福知山市立雀部小学校５年
谷本 凛々	八幡市立橋本小学校２年	山口 真凛	舞鶴市立新舞鶴小学校１年
久保 健	木津川市立加茂小学校３年	開 花夏	舞鶴市立大浦小学校５年
内山 綾乃	木津川市立梅美台小学校１年	上山 颯馬	伊根町立本庄小学校５年
西村 統寿	久御山町立東角小学校１年	小西 希歩	与謝野町立加悦小学校２年
髙尾 幸加	井手町立井手小学校１年	矢野 日向	京丹後市立いさなご小学校４年

―家族ふれあい大賞―

京都府知事賞

「おじいちゃんちで、スモモ狩り」

京田辺市立草内小学校６年
村上　穂乃歌さん

京都府青少年育成協会会長賞

「かぞくみんなとピクニック」

京都市立正親小学校２年
飯田　花帆さん

京都府教育委員会教育長賞

「お父さんの背中にのって」

宇治田原町立宇治田原小学校１年
今西　栗子さん

―「家庭の日」賞―

京都市教育長賞

「かたたたき」

京都市立伏見板橋小学校５年
吉田　葉七さん

京都市長賞

「出産おめでとう」

京都市立御所南小学校３年
髙井　　蘭さん

京都府小学校校長会会長賞

「おいしい野菜がたくさんとれた！」

京田辺市立田辺小学校４年
渡邉　水翔さん

京都府市町村教育委員会連合会会長賞

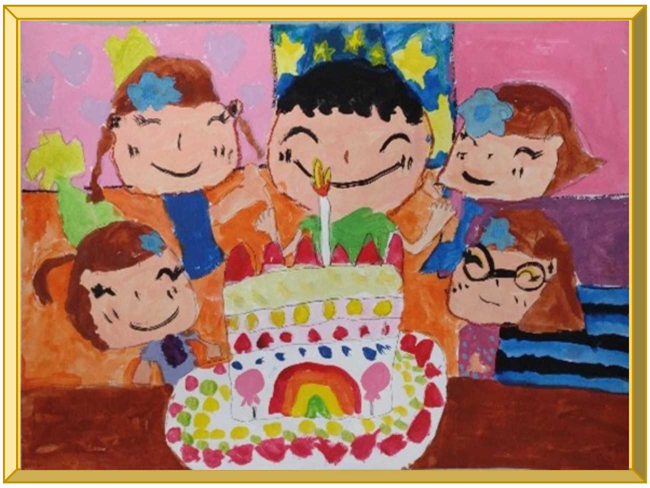
「家族だんご」

木津川市立高の原小学校３年
仲田　尊亮さん

―「家庭の日」賞―

京都府私立小学校連合会会長賞

「ちちのおたんじょうび」



京都女子大学附属小学校 １ 年
城戸　紅葉さん

京都市小学校長会会長賞

「大好きな妹の七五三参りの日」

京都市立正親小学校 ５ 年
飯田　直央さん

―まいにちがたからもの賞―

読売新聞社賞

「大好きなプール」

木津川市立南加茂台小学校２年
中嶋　秋穂さん

毎日新聞社賞

「きれいな花火」

木津川市立相楽台小学校 ３ 年
川嶋　将生さん

―まいにちがたからもの賞―

日本経済新聞社京都支社賞

「家族６人で記念写真」

京田辺市立三山木小学校２年
内藤　結葵さん

産経新聞社賞

「はるとおいかけっこ」

京都市立花園小学校３年
河邊　純羽さん

エフエム京都賞

「かぞくでキャンプ」

木津川市立城山台小学校２年
楠田　結菜さん

NHK京都放送局賞

「かんびょうしてくれる母の様子」

南丹市立八木東小学校４年
小濱　優依さん

―優秀賞―

優秀賞

「大好きな本を家族のみんなに!!」

城陽市立青谷小学校１年
前田　泰佑さん

優秀賞

「家族の音楽会」

長岡京市立神足小学校３年
張田　知華子さん

優秀賞

「みんなで入ると楽しいお風ろ」

木津川市立州見台小学校２年
鐘ケ江　真弥さん

優秀賞

「カニとり」

木津川市立城山台小学校１年
黒田　英嗣さん

―優秀賞―

優秀賞

楽しいクリスマス

精華町立精北小学校２年
奥田　翼玖さん

優秀賞

「ばあちゃんのスイカまってたよ」

木津川市立木津小学校２年
小川　瑞貴さん

優秀賞

「応援するって楽しいね！」

舞鶴市立新舞鶴小学校３年
山口　蒼衣さん

優秀賞

「かぞくとはなび」

相楽東部広域連合立和束小学校１年
久保　怜也さん

令和５年度「家族ふれあい大賞」
第 27 回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」

講　評

はじめに、2024 年元旦におこった能登半島での震災でお亡くなりになられた方々に心よりお悔やみを申し上げます。被害を受けられたすべての関係者の皆様に、お見舞いを申し上げます。震災の後、復旧が進まない状況から、子どもたちが家族と離れて暮らすことが余儀なくされているニュースを耳にし、そうしたご家族の決断にも子どもの未来を大切に思う気持ち、家族の強い絆を感じました。１日も早い復興をお祈り申し上げます。

さて、子育て応援のメッセージを伝える取組として、平成 15 年度から実施している「家族ふれあい大賞」の審査を今年もさせていただきました。

新型コロナ感染症が昨年５月に５類感染症移行したことから、活動制限もなくなり、より活発になった日常や、家族と過ごすイベントを描いた絵画が 796 作品、写真が 61 作品、総数 857 作品の応募がありました。応募してくださった子どもたち、ご家族をはじめ、このコンクールにご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。

審査に当たっては、この企画の趣旨である「明るい家庭づくり」「家族の触れ合い」をより感じさせてくれるものを選考しました。日常の様子、また特別な日のイベントを、子どもの目線で観察し、細かいディテールまで覚えて描いている様子に、家族と過ごす喜びや楽しさが伝わってきます。

近年はさまざまな要因から、家族の構成も、家庭の姿も多様になっています。デジタル化による社会の変化も加速しています。コロナ禍や自然災害などを経て、あらためて家族と過ごせる毎日こそがかけがえのない体験であり、それを描こうとする子どもたちの気持ち、シャッターを切る家族の思いには、ライフスタイルが変わっても、あたたかい心の交差や家庭が果たす役割の大切さがあると気付かされます。

子どもたちや子育て真っ最中のご家族が、絵や写真をきっかけに笑顔になり一緒に選びながら、心の風通しがよくなってくれればと思います。そして作品に表現された喜びが、より多くの皆様に伝わり、子どもたちと子育てする家族の思いに繋がり、今一度家族について考える機会にしていただけたらと願っています。

京都市立芸術大学長　画家
赤松　玉女

第四十五回『少年の主張京都府大会』　概要

1　趣　旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心をもち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切である。

少年の主張京都府大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施した。

2　主　催

（公社）京都府青少年育成協会・京都府ＰＴＡ協議会・
京都市ＰＴＡ連絡協議会・（独）国立青少年教育振興機構

3　後　援

京都府・京都府教育委員会・京都市・京都市教育委員会・京都府市町村教育委員会連合会・京都府公立中学校長会・京都府私立中学高等学校連合会・京都新聞・朝日新聞京都総局・毎日新聞社京都支局・読売新聞京都総局・産経新聞社京都総局・日本経済新聞社京都支社・ＮＨＫ京都放送局・ＫＢＳ京都・エフエム京都（順不同）

4　作文の内容

（１）社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
（２）家庭、学校生活、社会(地域活動)及び身の回りや友だちとの関わりなど。
（３）テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

5　応募対象

京都府内の中学校及び特別支援学校中等部に在籍している生徒。
国籍は問わないが、日本語で発表できることが必要。
なお、作品は一人一作品で未発表、自作のものに限る。

6　経　過

（１）作文募集
令和五年四月下旬、募集要項及びポスター等を府内各市町村・市町村教育委員会、各中学校、青少年団体、関係機関等へ配布して募集

（２）募集締切
令和五年八月一日（火）応募総数　七〇四〇編（三十九校）

（３）応募作文の審査
第一次審査委員会を令和五年八月二十一日（月）、第二次審査委員会を九月四日（月）開催、入選十五編及び佳作三十七編を選定

（４）「少年の主張京都府大会」
令和五年九月二十三日（土・祝）、本願寺聞法会館「多目的ホール」において、本大会を開催 十五名の入選者が主張を発表。審査の結果、京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞・京都府青少年育成協会会長賞・京都市教育長賞・京都府市町村教育委員会連合会会長賞・京都府公立中学校長会会長賞・京都府ＰＴＡ協議会会長賞・京都市ＰＴＡ連絡協議会会長賞・京都新聞賞・ＫＢＳ京都賞の各一点を決定

【第一次審査委員】（五十音順・敬称略）
勝間喜一郎　杉本　勝

【第二次審査委員】（五十音順・敬称略）
野村　大輔（委員長）
上田　静男　上田　智子　西田　一慶
東谷　祐子　福田　昌弘

【大会審査委員】（五十音順・敬称略）
野村　大輔（委員長）
上田　静男　上田　智子　寺内　繭　西田　一慶
東谷　祐子　福田　昌弘　中本　貴久　丹羽　寛美

（５）「少年の主張」全国大会への推薦
京都府知事賞を受賞された相楽東部広域連合立笠置中学校三年アブドゥル フセイン・ナジュマさんを全国大会候補者として推薦し、近畿・中部ブロック代表として全国大会で主張を発表し、国立青少年教育振興機構奨励賞を受賞された。

（６）その他
①「少年の主張京都府大会」の模様をネット配信しています。
＊当協会ホームページからアクセスできます。
②「少年の主張京都府大会」ＤＶＤを作成し、府内の中学校等に配布しました。

第 45 回「少年の主張京都府大会」

■入賞者・佳作者一覧■

入賞者

賞	テーマ	氏 名	学校・学年
京都府知事賞	おばあちゃんが教えてくれたこと	アブドゥル フセイン・ナジュマ	相楽東部広域連合立笠置中学校 3 年
京都府青少年育成協会会長賞	#家族時間	大 城 愛 未	亀岡市立東輝中学校 3 年
京都府教育委員会教育長賞	いろいろなベクトルが行き交う部活	櫛 田 実 希	長岡京市立長岡第四中学校 3 年
京都市教育長賞	「自信」を持て、私	谷 まどか	京都光華中学校 3 年
京都府市町村教育委員会連合会会長賞	小さなことだけれど　意識を行動に	筈 井 和 奏	長岡京市立長岡第四中学校 3 年
京都府公立中学校長会会長賞	違いと共にあるために	川 上 香 羽	精華町立精華南中学校 3 年
京都府ＰＴＡ協議会会長賞	白紙のスケッチブック	三 村 吉 平	亀岡市立東輝中学校 3 年
京都市ＰＴＡ連絡協議会会長賞	なぜ勉強するのか	坂 本 有 彩	京都府立洛北高等学校附属中学校 3 年
京都新聞賞	原爆ドームから平和を考える	高 垣 心 椰	京田辺市立田辺中学校 2 年
ＫＢＳ京都賞	長所の探し方	大 垣 灯	宮津市立栗田中学校 2 年
京都府青少年育成協会会長奨励賞	今ならできるぞ、ぼくになら	黒 地 咲空斗	城陽市立東城陽中学校 3 年
京都府青少年育成協会会長奨励賞	どうしてこうなるの?	北 川 瑞 季	亀岡市立南桑中学校 1 年
京都府青少年育成協会会長奨励賞	書き留めておくもの	谷 村 知 洋	京都府立福知山高等学校附属中学校 2 年
京都府青少年育成協会会長奨励賞	姉ちゃん、静かにしてぇ!	楠 本 昇 弦	亀岡市立育親中学校 3 年
京都府青少年育成協会会長奨励賞	「当たり前の日々の大切さ」	新 城 光 規	舞鶴市立城北中学校 3 年

佳作者（順不同）

氏 名	学校・学年	氏 名	学校・学年
川島　楓	向日市立西ノ岡中学校 3 年	鎌倉　日和	舞鶴市立城南中学校 3 年
廣川　世莉	長岡京市立長岡第四中学校 3 年	吉田　亜胡	舞鶴市立若浦中学校 3 年
今村　文音	長岡京市立長岡第四中学校 3 年	谷口　莉愛	舞鶴市立加佐中学校 3 年
川端　萌生	長岡京市立長岡第四中学校 3 年	堀　愛未	宮津市立宮津中学校 2 年
榊田　順子	長岡京市立長岡第四中学校 3 年	井﨑　咲希	与謝野町立加悦中学校 3 年
今井くるみ	長岡京市立長岡第四中学校 3 年	金谷　基央	与謝野町立江陽中学校 3 年
稲垣　絢梨	城陽市立南城陽中学校 3 年	黒田　るな	与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校 3 年
吉田　柚花	京田辺市立培良中学校 2 年	南　天満	与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校 3 年
角田　栞菜	宇治田原町立維孝館中学校 3 年	大槻　彩葉	京都府立洛北高等学校附属中学校 1 年
入江千咲妥	亀岡市立南桑中学校 2 年	中村　瑛太	京都府立洛北高等学校附属中学校 1 年
牧野　心春	亀岡市立南桑中学校 2 年	田中　小春	京都府立洛北高等学校附属中学校 2 年
菅沼　妃那	亀岡市立南桑中学校 2 年	短田　理紗	京都府立洛北高等学校附属中学校 3 年
都筑　沙羅	亀岡市立南桑中学校 2 年	曽川　茉那	京都府立南陽高等学校附属中学校 3 年
居相　咲希	福知山市立夜久野中学校 2 年	常岡　祐輝	京都府立福知山高等学校附属中学校 1 年
大月　摩耶	福知山市立夜久野中学校 2 年	松岡　菜月	京都府立福知山高等学校附属中学校 2 年
石田　光生	福知山市立夜久野中学校 3 年	桙井　彩花	京都府立福知山高等学校附属中学校 3 年
近藤　悠人	舞鶴市立青葉中学校 3 年	金森　優佳	京都府立福知山高等学校附属中学校 3 年
上西　胡桃	舞鶴市立白糸中学校 3 年	西村　心	京都府立福知山高等学校附属中学校 3 年
北川　幸	舞鶴市立和田中学校 3 年		

京都府知事賞

「おばあちゃんが教えてくれたこと」

相楽東部広域連合立
笠置中学校　３年
アブドゥル　フセイン・ナジュマ

　皆さんは、「アフガニスタン紛争」を知っていますか。二〇〇一年十月から約十年間にわたって続いた、アメリカを中心とする連合軍とタリバンとの間で起きた紛争です。二〇二一年、八月三十日にタリバンが政権を回復することで終結しました。タリバンとは、アフガニスタンを実効支配するイスラム教スンナ派、デーオバニドのイスラム主義組織のことです。つまり、テレビなどでよく言われている、イスラム過激派集団です。私にとってこの紛争は、とても身近なものでした。

　私はドバイで、アフガニスタン人のお父さんとお母さんの元に生まれました。今は、お父さんの仕事のために家族みんなで日本に住んでいますが、両親は、この紛争から逃れるためにアフガニスタンからドバイへ移住したそうです。しかし、多くの親戚はまだアフガニスタンで暮らしています。もちろんその中に、私のおじいちゃんとおばあちゃんもいます。私は小学一年の時に日本へ来ました。その日から今日まで、おばあちゃんに会っていなかったので、いつか一人で飛行機に乗れるようになったらおばあちゃんに会いに行こうと思っていました。大きくなった私の姿を見せてあげたかったからです。しかしその願いは、私が小学五年生の時に絶たれてしまいました。

　私のおばあちゃんは、アフガニスタンの病院で、ガンのために入院していました。その病院を、ある日突然タリバンは襲ったのです。その時おばあちゃんは病室にいて、タリバンの無作為な民間施設の襲撃によって命を奪われてしまいました。この事実を知った時、私はとてつもない怒りと悲しみで胸がいっぱいになりました。おばあちゃんは、なんとか病気を治そうと必死で闘っていたはずなのに、その瞬間から、その希望を奪われてしまったのです。自分の意志で人生を最後まで全うすることができなくなってしまったのです。

　このように、誰かの人生を奪うということは、亡くなった人の人生を奪うだけでなく、その人に関わるすべての人の幸せを奪うことにもなるのです。そんなことはあってはならないと思います。今も、世界中で戦争や紛争が続いている国がたくさんあります。最近では、ロシアのウクライナ侵攻が毎日のようにニュースやＳＮＳで目にするし、そこで起こる痛々しい様子を写真や動画で見ることもできます。それを見るたびに、私は悲しい思いでいっぱいになり、他人事ではないと強く感じました。

　私は、武力的な行為で人が命を落とさなければいけないのはおかしいと思います。その人の人生を全うする権利、生きる権利を奪うことにもなるので、りっぱな人権侵害だと考えます。どんなことがあっても、どんな理由があっても、人の命や人生を奪ってはいけません。今の私は、まだまだ政治的な難しい事はわかりません。教えてください。なぜ、このようなことが世界中で起こっているのか。なぜ、こんなやり方をしなければならないのか。そして、皆さんと一緒にこのようなことが起きないような世界をつくるために、私たちにでもできる小さな一歩を考えていきたい。どこに生まれて、どんな言葉を使って、どんな思想を持っていても、この地球に生まれたかけがえのない一人として、誰ひとりの命もムダにならない、自分らしく自分の人生を全うできる世界について考えていきませんか？

京都府青少年育成協会会長賞

「#家族時間」

亀岡市立東輝中学校　３年
大城　愛未

私たちは今、「思春期」の真っ只中にいる。そんな私と同年代の皆さんに聞きたい。あなたは、家族との時間を自ら作っていますか。感謝の気持ちを伝えたり、笑顔で会話する時間を増やしたりしていますか。

　私には、二つ年上の兄がいる。小さい頃、私は毎日のように兄と遊んでいた。兄の大好きなトミカで遊んだり、ごっこ遊びをしたり・・・なんだかとても愛らしい思い出だ。兄妹ゲンカをすることももちろんあったが、私にも妹にも優しい兄が大好きだった。

　九年前の夏のある日。家族で海に出かけることになった。小学一年生だった私にとって家族そろって行く、初めての海。ワクワクした気持ちの一方で、出かける前に兄と喧嘩をしてしまった私は、海に向かう車の中でも、兄と言葉を交わす事はなかった。

　到着すると、初めて見る海の壮大さに目を奪われた。潮の匂いや波の音、そこで遊ぶ人たちの笑い声。まるでサファイアが溶け込んだような、雲ひとつない青空が映る、きれいな水面。幼い私は心を一気につかまれ、初めての海を思いっきり楽しんだ。

　しばらくして、私と妹は浅瀬で遊んでいた。兄の名前を呼ぶ大人たちの声に気づいた。気づくと、そばに両親もいない。嫌な予感がして、私が走った先には・・・たくさんの人たちに囲まれて、泣き叫ぶ母と、父から心臓マッサージを受けている兄の姿があった。その時のことは、九年経った今も、鮮明に覚えている。救急搬送先の病院で、両親は私と妹を「ごめんね。」と抱きしめた。二人の震える手と、初めてみる父の泣き顔を忘れることができない。私は、自分が必死に我慢して「私は大丈夫だよ。」と言った。小さいながらに「私が家族を守らないと。」と思ったのだ。

　その日から、家族の生活はガラッと変わった。兄がいない家では、家族みんなで笑い合うこともなくなり、両親は毎日、入院した兄に付きっきりとなった。あのとき、「家族を守ろう」と思ったのに、家族が揃わない毎日に孤独感も感じた。そして、あの日喧嘩した兄ちゃんと謝れていないことは、ずっと私の中で心残りとなっていた。

　改めて、皆さんに聞きたい。あなたは、家族との時間を、感謝の気持ちや笑顔で会話する時間を大切にしていますか。

　私の家族は、あの日まで当たり前だった毎日が大きく変わった。家族がいかに大切で尊いものかを、私は改めて知った。

　そして今、毎日泣いていた両親は、周りの多くの人に支えられて、笑顔で過ごすようになった。私たち姉妹をしっかり守る為に、他の家族以上に笑って過ごそうと、家族のイベントも日々の生活も、人一倍大切にしてくれている。だが、私もいわゆる「思春期」だ。毎日一緒にいると、両親に、ちょっと反抗的な態度をとってしまうこともある。妹の態度で腹が立って、叱ってしまうこともある。でも、もしそばにいる人大切な家族の笑顔が、明日見られなくなったら・・・。

　家族は誰より近くて、けれど近すぎて、素直に感謝や優しい言葉が言えない。つい、一人の時間が作りたくもなる。けれど、私たちが家族と過ごすことができる#家族時間も、果たしてあと何年あるだろうか。突然の別れでなくても、家族時間は限られているのだ。だから、言いたい。大切な言葉は、言える時にきちんと伝えよう。

　「お兄ちゃん。さっきはごめんね。いつも優しくしてくれてありがとう。大好きだよ。」

京都府教育委員会教育長賞

「いろいろな　ベクトルが行き交う部活」

長岡京市立
長岡第四中学校　３年
櫛　田　実　希

「今年も金賞目指すよね？」「もちろん」「関西大会も目指して頑張ろう！」「いや、そんなに頑張りたくない」「しんどいしやめとこうや」これが私の部活だ。みんな悪気があるわけではない。しかし、一人一人に意見を問うといつもこうなる。元は音楽が好きで、吹奏楽が好きな人たちの集まりだ。それでもベクトルは行き交う。私は部長をしている。いつも悩むのは、そんなみんなのベクトルをそろえることだ。

　そこで私は、いろいろなベクトルが行き交うのはなぜなのか考えた。まず一つは、人によって得意・不得意があるということだ。楽器が上手でほめられることが多い人もいれば、音楽が大好きでもあまり上手に演奏できない人もいる。ほめられることが多い人の方がやる気が出るのは当然だ。また、人によって入部の動機も異なる。演奏を聴いたことがあって、強い憧れを持って入った人もいれば、仲の良い友達に誘われて入った人もいる。するとどうしても情熱に差が出てしまうのだ。そして情熱に差が出ると意見がぶつかる。三年生の夏を部活に捧げて金賞や関西大会を目指したい人と、部活よりも受験勉強を頑張るために塾の夏期講習に行きたい人。意見が対立して、人間関係までもこじれてしまうのだ。他にも、家の事情も理由として考えられる。親が全面的に賛成してくれて入部している部員もいれば、親はあんまり賛成してくれていないが入部したという部員もいる。私の部活でも、両立は難しいという理由で、習い事の先生や親には反対されたが入部したという人がいる。その人自身がどれだけ吹奏楽部に情熱的だったとしても周りの協力がなければ部活動に一生懸命になることはできない。それは私がこれまで活動してきた中で、一日練習がある日はお弁当を作ってくれたり、演奏会がある時は聴きに来てくれたりと、周りの人に支えられた部分がたくさんあったから言えることだ。このように、いろいろなベクトルが行き交う理由は様々である。

　そこで私は考えた。どうすればベクトルをそろえることができるのか。だが、これだけ様々な理由がある中で、ベクトルをそろえることは不可能だ。だからそろえようとするのではなく、その人その人に快適な空間を創るということが私がしなければいけないことなのではないかと思う。その方法として考えたことは、まずは部員一人一人の事情を理解してあげるということだ。部長である私が理解し、寄りそうことでその人が抱えている悩みや不安を解消できるかもしれないし、自分から意見を言ったりするのが苦手な人でも、先輩を通じて意見を部に発信できる機会となるからだ。そうすると、その人自身が部活に来やすくなるのはもちろん、上級生だけの話し合いの中では出なかった意見が出て誰かの考えが変わったり、それをきっかけに話の方向性が変わることがあるかもしれない。私は、これは自然とベクトルがそろっていくための方法とも考えられると思う。部活に取り組みやすい環境を作ることによって技術面の上達も図れて、上達することによってモチベーションも高められるからだ。家の事情を変えることはできないが、部活に来ている時に一人一人がどんな気持ちで、どう取り組むかというところだけでも変えられれば、部は良い方向に進むと思う。

　今、部活動を通して考えていることは、これから社会を担っていく立場になっても役立つのではないかと思う。部長という大きな責任を背負った立場に立ち、投げ出したくなったこともあった。行き交うベクトルに悩み、涙を流すこともあった。でも、その度に部員で話し合い、真剣に向き合った経験は、とても貴重であった。大人になったときにどんな道に進むかはまだ分からないが、どんな道に進もうと、いろいろなベクトルが飛びかう、激しくもあり、生き生きともしたチームの経験は今生きている私たちにこそ与えられた特権でもある。さまざまなベクトルをできるだけたくさん生かし、これからの人生を輝かせたいと思う。行き交うベクトルは決してマイナスなものではない。むしろ、躍動感のあふれた輝かしいものだ。

京都市教育長賞

「「自信」を持て、私」

京都光華中学校　３年
谷　まどか

　姉だから何だ。これは私が小学生の頃、心の中にあった大きな叫びです。この考えは、私が小さい頃に幾度も体験したことで、出来上がりました。

　私は妹と弟がいる長女です。妹と、しばらくして弟が生まれて、愛は次第にそちらに向けられていきました。母は「お姉ちゃんだから」と決まり文句を口にし、弟ばかり気に掛け、父は幼い妹の方に気持ちを向けました。頑張ったら褒めてはくれますが、すぐ弟妹の方に傾いていくように感じてしまいました。それで、自分は悪い子なのだろうかと思った私は、自分に自信をなくし、周りとあわせたり、周りの目を気にするようになったりしたのです。

　そんな私を変えてくれたのが、二人の親友の言葉です。一人目の親友は、小学校であった自身の体験から「ありのままの自分でいい。周りの目を気にしていたら何もできない。」と言っていました。もう一人の親友は、「自分の人生は一度きりだから、胸を張って自信をもって生きていけばいい。」と言っていました。

　私はそれらの言葉のおかげで「ありのままの自分に自信を持っていい。人生は自分なりに楽しんだもの勝ちだ。」と気づかされました。二人には恥ずかしく、面と向かって言えていませんが、いつか沢山の感謝を述べるとともに、恩返しをしたいと思っています。

　親友の言葉で勇気をもらった私は、家族の中でも、自分らしくあろうと努力しました。そうすると「姉だから」という圧迫感がなくなり、「しっかりしている私だから頼られているんだ」という自負心が芽生えてきました。

　これらの経験で、私は三つのことを学べました。

　一つ目は、自分を変えるためには恐れずに一歩を踏み出すということです。一歩踏み出すためには必ず覚悟と勇気がいります。自分の人生を変えることになるかもしれないからです。でも、恐れなくて大丈夫なのです。それが自分を変えられる後悔しない選択だと思うのならば、幸せの道を進むべきです。

　二つ目は、周りの人に頼っていいということです。人間全員孤独ではありません。周りには必ず支えてくれる人がいます。その人たちに頼ったらいいのです。絶対に迷惑なんて思われていません。しっかりと聞いてくれて、改善策を考えてくれたり、一緒に悩みを背負ってくれたり、寄り添ってくれたりします。

　三つ目は、ありのままの自分でいていいということです。一人一人個性があるのは当たり前です。だから、その個性を自分なりに表現していいのです。周りにあわせて自分を隠さなくていいのです。

　そして、三つのことに共通している大事なことがあります。それは「自信」をもたなければ始まらないということです。一歩を踏み出すにも、悩みを打ち明けるにも、ありのままの自分を表に出すにも、「自信」が必要だからです。

　ミヒャエル・エンデが書いた『モモ』に次のような文が書いてありました。『俺は俺なんだ、世界中の人間の中で、俺という人間は一人しかいない、だから俺は俺なりに、この世の中で大切なものなんだ』と。

　この文の通り、自分という人間は一人しかいません。世界中の人間の中で同じ顔や性格、個性などを持っている人はいません。一人一人が、唯一無二の存在なのです。だから、絶対に誰かに必要とされています。その必要とされている自分にありったけの「自信」をもっていいのではないでしょうか。

　私は、ありのままの自分で輝ける人になりたいです。その為に、沢山の事を学び続ける大人になりたいです。きっと進む道には壁が立ちはだかることもあると思います。だから、その壁を打ち砕くくらいの「自信」を自分に持ち、胸を張って一度きりの人生を歩んでいきたいです。

「自信」を持て、私。

京都府市町村教育委員会連合会会長賞

「小さなことだけれど　意識を行動に」

長岡京市立
長岡第四中学校　３年
筈井　和奏

皆さんは、「ドギーバッグ」という言葉を知っていますか。ドギーバッグとはレストランなどの飲食店で外食した時に食べきれなかった料理を持ち帰るための容器、袋のことです。日本では、環境省が令和二年に選定した「mottECO」の方で聞いたことがあるかもしれません。mottECOもドギーバッグと似たような意味の言葉で、飲食店での食べ残しの持ち帰り行為のことを意味します。ドギーバッグは日本ではあまり見かけませんが、アメリカや中国などの海外では当たり前のことです。チェーン店に限らず高級なお店でも珍しくないことです。

　ドギーバッグという言葉が生まれた理由は、食品ロス量の増加が原因です。二〇二一年の農林水産省の推計値によると、食品ロス量五百二十三万ｔのうち十五％が外食産業によるものだということが分かっています。このまま食品ロス量が増えると、十分な量を食べることができず栄養不足になる人が増えたり、二酸化炭素が排出され地球温暖化が進む原因になってしまったりと問題が増えていってしまいます。なぜ私がドギーバッグに興味を持ったかというと、ニュース番組で食べ残した料理の持ち帰りサービスを始めた飲食店が取り上げられていたからです。気になって調べてみると、大手飲食店でもドギーバッグを導入しているところが多く、今までドギーバッグを導入しているお店を見たことがなかったことも相まって驚きが大きかったです。

　メリットとして一番大きいことは、残った料理を廃棄せずに済むことです。料理を残してしまうと、私達客側からしたら罪悪感が残り、店側からしたら客が残した料理は家のように冷蔵庫に保存して翌日に食べることができず、捨てるしか道がありません。料理を捨てる作業がなくなると、従業員の負担だけでなく気持ち的にも楽になると思います。廃棄コストを削減できることも大きな魅力だと思います。日本もったいない食品センターによると、令和元年の一般廃棄物処理費用約二兆八百八十五億のうち食品ロスが二十三％を占めていることが分かります。もしも食品ロスを減らせたら処理費用を他の用途に使うことができます。また、焼却した時に発生する二酸化炭素を削減することもできるので、地球温暖化の原因となる温室効果ガスの発生抑制にも繋がります。環境だけでなく、私達にもメリットがあり、高血圧や糖尿病を引き起こす原因となる食べ過ぎを防ぐことができます。他にも、現在ではSDGsに関心が高まっていることから、注目してもらえるきっかけにもなります。一方でデメリットもあります。最も大きいのは、避けては通れない食中毒問題です。食中毒が起こってしまうと客だけでなく店も大きな影響を受けてしまいます。苦情の対応に追われたり、マイナスイメージが付けられてしまいます。食中毒が起こってしまうと客よりも店のほうがダメージを受けてしまうので、これがなかなかドギーバッグが日本に浸透しない原因かもしれません。また、持ち帰るための容器のコスト問題もあります。やはり、食品を持ち帰るので包装は入念にしないと中で崩れたり、虫が寄ってきたりなどの問題が起こります。

　これらのメリット、デメリットを含めた上で私はドギーバッグに賛成です。食中毒などの課題はありますが、食品ロス量削減から地球温暖化を食い止めたりと結果的にメリットの方が多いからです。私が提案していることは食品ロス量の中でも「十五％」と、割合が少ない課題です。数字だけを見るとちっぽけなことかもしれません。ですが、考えるだけではなく、取り組んでみることが大切なのではないでしょうか。積み重ねていけば必ず大きな結果に繋がると思います。ドギーバッグも続ければ他の食品ロス問題の解決に繋がるのではないでしょうか。意識を行動に移すことが大切だと思います。

京都府公立中学校長会会長賞

「違いと共にあるために」

精華町立精華南中学校　３年
川　上　香　羽

私の通っている精華南中学校では、毎年、人権について考える授業があり、昨年は「共生」というテーマで障害者理解を中心に学びました。その授業を通して、私は、「共生とは、人々が違いを認め合い、笑顔で生活できることをいうのだ」と思いました。それを受けて、共生できる社会にするために、私は二つのことが大切だと考えました。

一つ目は、障害がある人たちのことを深く知ることです。こう思ったきっかけは、中村珍晴さんの講演を聞いたことです。車いすでいらっしゃった中村さんを見たとき「足を悪くされたのかな」と思いました。しかし講演の中で、中村さんがアメリカンフットボールの試合中に人とぶつかり、首の脊髄を損傷して、足だけでなく手も不自由になり感覚がないことや、排泄障害もあることを知りました。中村さんの外見から手足が不自由だということは分かりましたが、感覚がないことや、排泄障害があることは目に見えないため、分かりませんでした。このような「見た目だけでは分からない症状」があるということも理解し、困っていたら声をかけたり、手助けをすることが大切だと思います。講演中に中村さんは、自分でマイクを持ち、パソコンのボタンを押し、自分で車いすを動かしておられました。その一方で、学校で出された飲み物は、ペットボトルでは飲みづらいので、コップで出されていました。それを見て、きっと困っているところだけをサポートすれば、あとは自分の力で十分に生活できるのだと感じました。「かわいそうだから」などと勝手な同情をして、手助けをしすぎる必要はないと思うのです。相手ができることまで手助けするのではなく、相手が必要としているだけのサポートをすることが、私たちのすべきことだと思いました。

私は中村さんの講演をふまえ、「違いはあたりまえにあるものだ」と改めて実感しました。このことから、大切にすべき二つ目のこととして、気づいたのは、「違い」とは何かを改めて考えることです。そこで、「違い」を二つの言葉におきかえてみました。

まずは、「差」という言葉です。ただこれでは、「あの人は自分たちとはちがう」と、自分と他人の間に差をつくってしまうことになります。こうなってしまうと、「共生の社会」はなかなか実現できなくなります。

そこで、もっと前向きな言葉におきかえられないかと考えた結果、「個性」という言葉にたどりつきました。得意、不得意や好き嫌い、ものの考え方や性格など、個性は一人ひとりが必ず持っているものです。それと同じように、車いすに乗っているのも、目や耳が不自由なのも、一つの個性として向き合うことはできないでしょうか。障害があることを、「特別違っている」とは思わずに、一つの個性として考えれば、差別がなくなっていくと思います。そうなれば、違いがあたりまえに存在する社会で、人々が日々に幸せを感じながら、共に生きていけると思います。

今回の人権学習を通じて、お互いの違いがあたりまえに存在することを理解し、障害がある人たちのことをもっと知っていくこと、大切だと思いました。障害がある人たちに対し、相手が必要としているだけのサポートをして、笑顔で関わっていきたいなと思いました。一人一人の大切な、「違い」」と共にあるために。

京都府ＰＴＡ協議会会長賞

「白紙のスケッチブック」

亀岡市立東輝中学校　３年

三　村　吉　平

「人の価値は、その人が死ぬときに分かる」と言われるけれど、その価値とはいったい何なのだろうか。どのように見つけられるのか。僕が、そんなことを考えるようになったのは、ある出来事がきっかけでした。

ある日の夕方、友達と遊んでいた僕の携帯が震えました。「今すぐ帰ってきて。」母の異変に気づくも、声の迫力に圧倒され、僕はうなずくことしかできませんでした。何もわからないまま用意をして、僕たちは車に乗り込み、家を出ました。どこに行くかもわからず、僕は不安を抱きながら窓の外を見ていました。しばらく沈黙が続いた後、「親父、大丈夫かな。」と父が漏らしたこの一言で、祖父に何かあったのだとわかりました。だんだん見えてくる赤い十字のマーク、ドアが開き、消毒の匂いがまとわりつく。薄暗くて、いつもとは違う不気味さを感じました。長い廊下をそそくさと歩く両親の後を追い、ある一室に入ると、祖父が気持ちよさそうに眠っていました。ガタン・・・。膝から崩れ落ちる父と、泣く母。白衣を着た男性は「残念ですが、先ほど息を引き取られました。」と言いました。その言葉を聞いた父は泣いたけれど、なぜか僕は泣けませんでした。周りではみんなが小さく震えていましたが、僕は立って見ていることしかできませんでした。お葬式を終え、家に帰ると、今までと変わらない日々が、また始まりました。けれど「おじいちゃんの死に、僕は泣けなかった。」そのことが、頭から離れませんでした。

数日後、友達の家族に赤ちゃんが生まれました。僕は友達に誘われ、赤ちゃんを見に行きました。まだしわくちゃな寝顔が見えた途端、僕の頬を伝わって、涙が床に落ちました。おじいちゃんと同じ、暖かい寝顔。

「え、ちょ、お前なんで泣いとるん？」

急に泣き出した僕に、どうすればいいか分からずに慌てている友達が見えました。しばらくして、僕は泣き止みました。この時初めて僕は、祖父の死を認識したのだと思います。二度と見ることができない優しい顔、触れることができない大きな手、その一つ一つが大好きでした。人の「生」に触れて初めて、僕は「死」を感じることができたのです。生きているからこそ、死がある。その事実に気づかせられた日となりました。

その日の夜、一人でお風呂に入っていたときに、ふと考えました。「生と死の間である人生ってなんだろう。」「人の価値って何だろう。」それを知りたい好奇心で、胸がいっぱいになりました。考えて考えて考えて、分かったと思えばそれは物事の一面でしかないことに気づき、また考える。その繰り返しを経て、僕なりの答えにたどり着きました。

僕は、一人一人の心の中には、白紙のスケッチブックがあると思います。そこに長い人生で培った、経験という名の絵の具を塗っていく。生も死も、その一色に過ぎないのです。生まれたての赤ちゃんは、白紙のスケッチブックに何を描けばいいのかわからずに迷ってしまう。だから、助けを求めるように泣き、周りの人の助けを借りながら色をつけていく。そして、完成する。その絵こそ、人の価値だと僕は思います。人に違いがあるのは当たり前で、色のつけ方が一人一人違うのです。そしてその絵は、人の死と共に、眠る顔として表れるのだとわかりました。おじいちゃんの眠った顔は笑っていました。おじいちゃんの絵は、きっとすごく美しいものだったのだろうと思います。これこそ、「人の価値は、その人が死ぬときに分かる」と言われている理由だと思うのです。僕のスケッチブックは、まだ余白だらけです。この先、明るい色だけでなく、暗い色が塗られることや、傷ついてしまうこともあると思います。ですが、すべての色を上手に使って、美しい絵を描けるよう、これからの人生に色をつけていこうと思います。

京都市ＰＴＡ連絡協議会会長賞

「なぜ勉強するのか」

京都府立洛北高等学校
附属中学校　３年
坂　本　有　彩

人はなぜ勉強するのだろう。そもそも勉強とは何なんだろう。中学生の自分は、学校や塾で授業を受けたり、復習して試験を受けたりするということを普段行っている。今の私にとっての勉強は、試験に向けての勉強だ。それが自分の人生に本当に役に立っているのか、勉強することにはどんな意味があるのか、とても疑問に思う。勉強することは大切なことなのだろうとは思うが、それがどう大切なのか、勉強の本当の面白さとは何なのかを自分なりに考えてみた。

私は、試験前に、急いでできるだけ多くの単語や問題の解法を頭に詰めこもうとしたことがある。しかし、そのようにして詰め込んだ知識は、試験が終わればあっという間に忘れてしまった。その場の試験は何とかなっても、すぐに忘れてしまうような知識では、本当に賢くなったとは到底言えない。

また、試験に向けて、人やものの名前を覚えなければいけないときがある。これを覚えたところで、自分の生活の役に立つのだろうか。そう思ったこともある。

ここで、覚えてもすぐ忘れてしまうような勉強に意味はないのではないかと考えた。覚えてもすぐ忘れるということは、勉強する前と後とで成長していないからだ。

逆に、勉強していて、「なぜこうなるのだろう。」と疑問に思い、自分で調べて理解したことはなかなか忘れない。そう考えると、単に何かを覚えるということではなくて、「自分の頭で考える」ということが本当の勉強なのではないかと考えた。

私が今やっている主な勉強は、既に答えが見つけられているものを理解するというものだ。先人たちの偉大な努力で、分かったことを体系化されたものを学んでいる。私は、今やっている勉強は、その先にある「自分で考える」ということの準備段階だと考えた。今やっている勉強で考えるのに必要なスキルを身につけられる。

私は、人生で一番大切なことは、「自分の頭で真剣に考える」ということだと思う。これは、学問においてだけでなく、社会の色々な問題や、自分が疑問に思うことなど種々の問題に向き合い、考え抜くということだ。

当たり前のことだが、人は皆いつか死ぬ。生きている間に全てのことを理解するのは難しくても、何か一つでも、少しずつでも、自分なりに考えて、納得のいく答えを出そうとすることは意味のあることだと思う。死ぬまで、何となく、自分を騙し騙し生きていては、後悔のある人生になるだろう。

大昔から、人は素直な疑問を持って考えるということをしてきた。考えたことをまとめて、分野を分けていって、今の学問が生まれた。いきなりその体系化された学問を始めても、これが自分の生活とどう結びつくのか、疑問に思うのも無理はないと思う。ただ、それは何かを考え抜くという人間にしかできないことをして生まれたものだと理解して取り組めば、意識は少し変わってくる。

これから、生きていく上で、色々なことを考えるだろう。自分にとって大切なものは何なのか、幸せに生きるためにはどうしたら良いのか、まだ分からないことだらけだが、自分で考えるという経験は決して無駄にはならないということは分かる。人間として生まれて、何かを考える喜びを味わえるのはこの上なく幸福なことだ。学問の大本はそこにあるのだと思う。毎日をただ何となく生きるのではなく、人生には限りがあることを意識し、考える喜びを大切にしたい。

京都新聞賞

「原爆ドームから平和を考える」

京田辺市立田辺中学校　2年

高垣心椰

世界遺産登録から二十八年となった、広島市の原爆ドーム。正式名称は、「広島県産業奨励館」といいます。一九四五年八月六日の朝アメリカ軍が投下した、たった一発の原子爆弾により、壁や屋根の骨組みだけを残し、破壊されました。建物の中には、今もたくさんの破片が、そのままの形で残っています。「爆心地からすぐ近くにあり、核兵器の恐ろしさを伝える『原爆ドーム』を残そう。世界遺産として登録を求めよう。」という声が上がったものの、すぐに認められたわけではありません。さまざまな反対意見もありました。「壊せ」という声もありました。みなさんはどう考えますか。原爆ドームは世界遺産として残すべきだったのでしょうか。それとも、負の遺産は壊すべきだったのでしょうか。私は、絶対に残すべきだと思っています。

私が原爆ドームや戦争に関心をもつきっかけになったのは、小学校の国語で習った「ちいちゃんのかげおくり」です。空襲のため、家族とはぐれ、たった一人で死んでしまう幼いちいちゃんの話を勉強して、「戦争は怖い」と心から思いました。そして、昨年の夏、母の勧めもあって、京田辺市の「平和を考える小・中学生ひろしま訪問事業」に参加しました。実際に広島に行き、平和公園や原爆の子の像、もちろん、原爆ドームも見学しました。なかでも、強く印象に残ったのは、「平和記念資料館」です。館内には、当時の写真や絵、私と同じ中学生が持っていたお弁当箱や制服など展示されていました。それらを見ていると、胸がしめつけられました。自分なりに本を読んで、原爆について学んできました。しかし、いざ実物を見ると、私が思っていたよりも恐ろしく、原爆の脅威、悲惨さを強く感じました。「戦争を絶対に忘れてはいけない」「戦争のおろかさを、多くの人たちに伝え続けなければならない」と心から思いました。

ボランティアガイドの方や、語り部の方の話を聞き、さらに自分でも調べてみました。原爆ドームを残すか、壊すかの議論に終止符を打ったのが、たった十六歳で白血病のために亡くなった、楮山ヒロ子さんの日記だそうです。「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも、恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろう」という彼女の言葉は、たくさんの人たちの心を動かしました。しかし、「原爆のことは忘れてしまいたい。」、「当時のことが思い出されるから嫌だ。」「維持費がとてもかかるため、市民の負担が増える。」といった、反対意見もたくさんあったといいます。確かに、その意見もよく分かります。

私達は戦争を経験していません。戦争経験者の高齢化が進み、体験を聞く機会も年々減っています。今を生きる私たちが、次の世代へと、原爆ドームと共に、平和への願いを伝えていかなければなりません。もちろん、「一人の意見で社会は変わらない」と思う人もいるでしょう。しかし、「原爆ドームを保存しよう」と声を上げたのは「広島折り鶴の会」の小・中学生達です。「歴史が浅い」ことなどを理由に、世界遺産登録に難色を示していた文化庁を動かしたのは、一六五万三九九六人分の、世界遺産登録を求める署名です。「平和について考えよう」、「学ぼう」とする人が少しでも増えれば、世の中は必ず変わっていくのです。

ウクライナとロシアのように、国と国との紛争に巻き込まれている人々が、今も死の恐怖と戦っています。そんな人達を増やし続けてもいいのでしょうか。唯一の被爆国である日本のみんなが、戦争について、平和について、もう一度考えてみませんか。小さな声であっても、積み重ねれば世の中を動かす、大きなうねりとなるはずです。

一人ひとりが、自分のこととして、平和を考える一員になっていきましょう。

ＫＢＳ京都賞

「長所の探し方」

宮津市立栗田中学校　２年
大垣　灯

人には良いところと悪いところがあり、それを長所、短所という。自分の長所と短所を言ったり、書いたりするには、自分を日ごろから客観的に見ることが大切なのである。

　私は、自分の良いところと悪いところをこれと言ってあげることができない。そう感じたのは、中学校に入学し、自己紹介シートを書くときだった。それぞれ、生年月日、好きなもの嫌いなものなどの項目がある自己紹介シートに、長所短所を書く欄が最後に並べられていた。何とか絞り出して長所と短所を比べると、短所の方が圧倒的に多く埋められている。長所は精々一、二個、しかも誰にでも当てはまるようなありきたりなものである。「自分って短所しかないじゃん。」そのときはそうとしか思わなかった。

　しかし、あるとき、自分で長所短所を把握することが大切なのだと自覚する出来事があった。それは、体育祭のブロック集会のときのことだ。ブロック目標の方針にある「得意なところは認め合い、苦手なところは伝え合い仲間と協力する」を達成するため、まず一人一人の個性を紙に書く活動があった。そのときは、やはりなかなかうまく書くことができず、何とか思いついたものを書き出して終わった。提出した後、「自分に長所と言えるものがあればな。」と友達に話していると、友達は私に「長所、たくさんあるよ。」と言ってくれた。私から見れば、話してくれた友だちこそ長所と言えるものをたくさんもっていた。その友達に対して、もっと自分を褒めたらいいのに、勿体ない、と思っていた私は、ここであることに気づいた。それは、自分にも当てはまるのではないかということだ。自分では長所がないと認識していたが、はたから見ると沢山あるように見えているのだ。これは、周りから見られている目を、自分が自分に向けられていない、つまり、自分を客観視できていないのではないか。

　この気づきを得てから、私は生活の中で自分の長所を探すことにした。すると、長所は私の思っていたよりもずっと多く発見できた。自分の良いところ、得意なこと、好きなこと、すべてが長所と言えるのだと感じた。ここまで自分の長所について知ることが出来たら、自分が好きになれる気がした。

　そうして生活していると、他人の長所についても発見が沢山あった。この子はやっぱり足早いな、この子はまとめ上手だな、この子はムードメーカーだな、など一人一人の長所、「個性」を見つけることができたのだ。そしてそんな個性は、様々な場面で活躍していた。たとえばクラスの班をみたとき、指揮を執ってくれる人、雰囲気を作ってくれる人、意見を出してくれる人など、メンバーそれぞれの個性を合わせることで班として、仲間としてまとまりが生まれていることに気づいた。

　みずからが輝くために、そしてまわりの良さを引き出すためにも、長所を把握しておくことは大切なことだ。そして、ここからが重要である。それは、自分で見出した長所をどう生かすか、ということである。その一つは、伸ばすということ、そして二つ目は、長所だけでなく短所も含め、それを自分の「個性」と表し、これからの未来の選択に利用するということだ。未来の選択というのは、例えば高校、大学入試。自分の長所がしっかり把握できていれば、選択する高校や大学がおのずと見えてくる。さらに、面接試験などで、自分を最大限アピールすることもできる。

　このように、長所を探すということは、自分や周りを客観視するきっかけになり、さらに未来の選択に役立ってくれる。自分の長所がわからない、という人は、ぜひ自分を客観視することを試してほしい。あなたの輝く良さは、必ず存在する。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「今ならできるぞ、ぼくになら」

城陽市立東城陽中学校　３年
黒　地　　咲空斗

　記録的な猛暑の夏、うだるようなこの暑さも、ギラギラと照りつける太陽の下での部活動も、僕にとってはさほど辛くない。今僕は、自分の足で地面を蹴り、風を切って思い切り走ることができている。陸上部に入り、練習を重ねる日々。時々、空を見上げては走ることの楽しさを噛み締めるのである。

　０才の頃、心臓に病気が見つかり、生後八ヶ月と十ヶ月の二度手術をした。後三週間発見が遅れていたら命の危険もあったそうだ。何時間にも及ぶ手術、全身につながれた何本もの点滴、飲食の制限でやせ細った姿。当時両親は、僕が走ることなんて考えられなかったらしい。

　お医者さんはもちろん、病院の方達や家族のおかげで、術後僕は回復し、特に運動制限等もなく日常生活が送れるようになった。思い返せば小学生の頃、母はよく僕に

　「チャレンジしなさい」

と言っていた。これは最近知ったことだが、母自身が僕の行動に、制限をかけてしまわないためでもあったらしい。つまり、一番大変な時を知っている周囲の大人達が無意識の内に僕を囲いこんでやる気や可能性を潰してしまうという、手術による弊害を心配してのことだった。

　おかげで僕は、心臓のことなど意識せず、様々なことにトライし、普通に友達と遊ぶことができた。四泳法を習得したり、マラソン大会に参加したり、放課後には毎日のようにサッカーをしたりして楽しく過ごせた。

　そして、六年生の夏、三度目の手術。予後によってその先の運動制限の度合いが変わる大事な手術だった。だから、

「手術が成功したら、中学では絶対に運動部に入りたい。」と強く願っていた。

　三度目の手術から三年が経った今、自分の体の変化で気づくことがある。それは疲れにくくなったこと。以前は学校から家まで上り坂で必ず息が上がっていたし、プールに入れば、真夏でもくちびるが紫になっていた。お医者さんいわく、生まれた時から心臓に負担がかかていたので、疲れること自体が当たり前になっていたそうだ。今は１日中プールで遊べるし、車で行けば早く終わるような買い物も走る目的で引き受けて、わざわざ遠くの店に行くことだってする。そのぐらい走れることが嬉しくて、走ることが楽しくて仕方がないのだ。

　真黒に日焼けした僕を見て大人達はどこか嬉しそうにしているように感じる。きっと僕が赤ちゃんの時にたくさん心配してくれたのだと思う。こんな風に病気のことを作文に書く日がくるなんて想像していなかったにちがいない。

　今僕はわくわくが止まらない。幼い頃のような言われてするチャレンジではなく、次から次へとやりたいことが自ら湧き上がってくるのだ。例えば、色々な国で見たことのない景色を写真や動画ではなく、自分の目で見てみたい。様々な国の人と話したり、現地の食べ物を食べてみたい。自転車で旅だってしてみたい。富士山にも登ってみたいし、一度はフルマラソンにも挑戦してみたい。そのための、語学の勉強や体力作り。視野を広げ、見識を深める。やるべきことは山積みだ。さあ、夢をかなえよう。今ならできるぞ、ぼくになら。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「どうしてこうなるの?」

亀岡市立南桑中学校　1年
北川　瑞季

「いつもいつもどうして。どうしてこうなるの。いつも何かがあった時、人と僕とが違うことに心がしんどくなる。どうして、なんでこんなに頑張っているのに。

　自分とみんなは違う。そのことに薄々気づき始めたのは、小学校三年生の時だった。

　僕はみんなと違う。僕は、みんなが行っているところに行かず、自分が「行きたい！」と思うところに行く。みんなが行っていることをせず、「したい！」と思うことをさきさきやってしまう。僕にはできないことも多すぎた。人の話を聞くこと。目を見て話すこと。こんな当たり前のことができなかった。いつだってそうだった。集中ができなかった、どうしても。

　そのたびに、「集中しなさい。」「何でできてへんねん。」「おかしいやろ。」そんなことばかり言われた。

　悲しかった。僕はどうしてこんなにも人と違うのだろう。それがとにかく辛かった。みんなが当たり前にできることも、僕にはできなかったから。

　何より一番辛かったのは、「こんなこともできないのか。」「何回言ったら分かるの。」と周りから言われたこの二つの言葉だった。

　しょうがないじゃないか。誰にでもできないことはあるだろう。自分にそう言い聞かせて、とにかく我慢した。でもそんな我慢がいつまでも続くわけもなく、いつしか僕の心は潰れそうになっていった。

　けれどそんな僕を救ってくれたものがあった。一つ目は「友達」だ。僕の存在意義であり、今もこうして生きていられる理由。小学校四年の時に仲良くなった彼は、優しくて明るくて、僕に光をくれた人だった。彼は僕が初めて心を開けてしゃべれる人になった。人と違っていて、だめなことがたくさんあったはずの僕を「僕のままで」大切にしてくれた友達に、僕は救われた。「自分が自分でいていいんだ。」そう強く思えた。

　もう一つ僕を救ってくれたもの。それは、「ものを創ること」だった。何をするにも落ち着きがなかった僕は、あるとき段ボール工作を始めた。その時僕は、0から完成をイメージしてものを創ることが「できる」のだと気づいた。僕はものを創造することが得意なのではないか、と。自分にも、できること、人に自慢できるものがあった。自分のことを「すごい」と思えることに出会えた。このことは僕の人生にとって大きな光になった。

　今僕は生きている。みんなと同じ場所で、みんなと同じ生活をし、同じことに喜び、同じことに悲しむ。友達も大切な人もいる。何より、今僕にはみんなと同じで「できる」ことがある。

　僕は、自分はみんなとは違っていて、自分は何もできない、そう思い込み悩んでいた。けれどもそれは違った。人には当然できないこともあるが、反対にできることも必ずある。僕は「ものを創ること」が得意であった。そして僕を僕のままで受け入れてくれる人がいた。これらのことが、僕に生きる希望と勇気をくれた。

　もしも昔の僕のように辛い想い、苦しい想いをしている人がいるのなら、「自分なんかだめなんだ。」なんて思わないで欲しい。「自分なんて」と思っているあなたにも、あなたをあなたのままで大切と思ってくれる人がいるはず。そしてあなたにもできること、あなただからできることがあるはず。だから諦めないで欲しい。自分なんかだめなんだと決して思わないで。

　僕と同じ苦しみを感じている人が、自分だけで思い悩むことなく、「大切だ」「得意だ」と思えることに出会える社会でありますように。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「書き留めておくもの」

京都府立福知山高等学校
附属中学校　２年
谷　村　知　洋

　手帳、僕たちは、さまざまな情報が飛び交う中、生活をしている。「皆さんは、手帳を頻繁に活用しているだろうか。それも、紙の手帳である」これを訊いて「ドキッ」とする人や、あるいは、何も感じないという人、「もっているけど・・・」という人もいるかもしれない。僕は頻繁に使用している方だと思っている。そして、その日の予定、また、やるべきことリスト、メモ、自分の将来に向けた対策に関しての整理などさまざまな機能として手帳を活用している。

　僕自身が現在通っている中学校では、紙の手帳を活かすことがとても奨励されている。そこには、必ずメリットがあるからに違いない。だが、手帳を利用している人の中でも、効果について理解できている人は多くないのではないか。

　僕の父は数年前までは紙の手帳を持っていたのだが今は持っていない。反対に、母は今も紙の手帳を使用している。だが、母のその手帳にはその日その日の予定のみが記されている。つまり、手帳の効果についてはあまり意識していないのではないか。そのような人がたくさんいるのであろう、ということである。

　ここで一つの疑問が生じる。一体、「手帳の効果」とは何なのか、ということだ。

　一つ目は、予定を簡略化して立てたり、今後の見通しがつきやすかったりすることがある。例えば、「この課題をこの日までにするぞ、と目処をつける」ように、優先順位を明確にし、するべきことやしたいことのリストを作ることもこれに当てはまる。

　二つ目は、日記のように後で振り返ることが出来るということである。例を挙げると、僕の通っている学校では、地域との繋がりやその活性化を最終目標とする特別授業がある。以前、その授業に関連のある学習の為、校外学習へ行ったその時、僕は現地の人の話をメモした。数日後、学校でその授業があったのだが、そのメモから次の今へと繋がるプロジェクトへ活かすことが出来た。手帳のようにメモするものを決めておくことで便利なのである。また、手帳はすぐに取り出しやすい。

　三つ目は、記憶の定着と再生である。紙の手帳か電子機器でのメモの効能の違いを研究した酒井邦嘉氏によると、その研究で紙の手帳では「五感を通して空間的な手がかりを与えることで、より深い記銘を可能にする・・・中略・・・記憶力や創造性につながる紙媒体の重要性が明らかになりました」という。つまり、大切な予定などの時に紙の手帳を使用するのはまさに好都合なのである。果たして、それが、記憶の定着、再生として活かされるのかは個人によって左右があるが。

　四つ目は、危機感を感じさせることである。これも以前、僕が学校のテスト等でとても忙しく、ある検定の対策が不十分だった時、手帳を見ると「あと、四日やん」とハッとさせられたことがあった。これは、先程一つ目で述べた「予定の簡略化、今後の見通し」につながるのだけれども、その予定を忘れてしまった際も記憶を呼びおこすタイマーのような役割を果たしているのだ。

　このように、手帳には予定を今後の見通しがつきやすいように立てられたり、後で振り返ったりすることができる。また、それによって、記憶を定着させ、さらに、それを活用することが出来る。そのうえ、予定が迫っているため、危機感さえ感じさせることができる。良いことづくしの代物なのだ。

　さまざまな情報が飛び交う現在。そんな情報をくまなく、長い時間覚えておくことは容易ではない。また、自分の未来へ設計を立てていかなければならない。そんな時、紙の手帳は人生を豊かにするものなのだ。さあ、皆さんも紙の手帳を活用してみよう。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「姉ちゃん、静かにしてぇ！」

亀岡市立育親中学校　３年

楠　本　昇　弦

僕と四つ違いの姉ちゃんがテレビに向かって叫ぶ！叫ぶ！叫ぶ！我が家で一番元気な人それは姉ちゃんである。姉ちゃんが叫んでいる理由は、韓国の男性アイドルグループが音楽番組に出演していたからだ。姉ちゃんは、韓国のアイドルを心から愛している。世界的に有名になった「BTS」の他に、姉ちゃんには三つくらい「推し」ているグループがあるらしいが、自分的にはその違いがいまいちよくわからない。この前母が、「BTS」のメンバーの一人、「sugar」さんを英語表記だったせいか、「スガさん」と間違えて呼んだことがあった。姉ちゃんはものすごく怒っていたが、僕も母もなぜそれくらいのことで怒るのか理解できず、気まずい空気が流れてしまった。それくらい姉ちゃんの韓国アイドル熱は高いのだ。

姉ちゃんのように、自分のイチオシを決めて応援する活動全般のことを「推し活」というらしい。元々は、熱狂的なファンが自分の好きなアイドルを「推し」と呼んだことが始まりのようだが、現在では二次元のアニメやゲーム、漫画のキャラクターをはじめ、スポーツ選手や歴史上の人物、さらには鉄道や建造物といった人間以外のものにまで「推し」の対象は広がっている。

僕の姉ちゃんは、この「推し活」を始めてから変わった。何事にも前向きで、物事をポジティブに考えるようになったのだ。もちろん最初は、いい成績をとったら「推し」グッズを買ってもらえるとか、お小遣いをたくさんもらえるといった打算的な理由が先行していたが、いつの間にか勉強することで得られる成果や、課題をやりきった満足感・達成感を味わうことがメインになり、その結果、自己肯定感が上がったというわけだ。自分に自信が持てること、積極的に行動する力が身につくこと、そして「推し」という共通点を通して広がる人間関係やコミュニケーション力。変わっていく姉ちゃんを近くで見ていて、きっかけは何であれ、何かに夢中になることは人を変える原動力になるのだなと思っている。

姉ちゃんは、韓国アイドルを通して、近くて遠い国と言われてきた「韓国」という国の文化にも興味を持ち、韓国語の勉強をしたりSNSで発信される韓国に関する情報のチェックに余念がない。実際僕たちの世代は、韓国という国に親近感や憧れといった感情を持つことの方が多い。韓国でも、若い世代には日本の文化、特にアニメやJ-POPが広く受け入れられ人気があるようだ。しかし、一方で、いまだ根強い反日感情をもたれている高齢者の方々が多いのも事実である。社会科の授業で日本と韓国の歴史を学んだときに、なぜこんなにも反日感情を抱くのかを理解した。一九九〇年代でも韓国では、日本を肯定したり日本の文化に触れることはままならなかったようだ。僕たちの世代は、過去の歴史を授業で学ぶだけで当事者意識は薄い。だからなのか国や歴史といった壁を越えて「いいな」と思ったものは柔軟に受け入れることができる。それを可能にしたものの一つがSNSの普及だと思う。SNSの進化がなければ、姉ちゃんが推し活をすることも、ポジティブに変身することもなかったかもしれない。過去を無かったことにするのではなく、過去の歴史を正しく理解し、過ちは真摯に受け止めた上で、互いの国の文化をリスペクトできる関係を築いていくことがこれからの未来を作っていく僕たちの役目だと改めて思う。

世界はSNSを通して近くなった。姉ちゃんが韓国語でテレビに向かって叫ぶ日もそう遠くはないだろう。そんな姉ちゃんを横目で見ながら、僕もこれだけは誰にも負けないぞという自分だけの「推し」を見つけ、自分に自信が持てるようになりたい。そのためにまずは志望校の合格通知をゲットできるように学力をつけることが今の僕の最優先課題だ。

余談だが、「推し活」は認知症の予防につながる効果があるとの研究結果もある。「推し」という対象を応援することで脳に新鮮な体験をもたらし、脳の活性化につながるらしい。少子高齢化問題に一役買うかもしれないとひそかに期待しつつ、テレビに向かって叫んでいる姉ちゃん、もうちょっと静かにしてぇ！

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「当たり前の日々の大切さ」

舞鶴市立城北中学校　3年

新　城　光　規

この出来事が起こる前までは、当たり前の日常の大切さを一度も考えたことなく、過ごしていた。

二年前の夏、突如僕の当たり前の日常が崩れた。「脳腫瘍が大きくなってきてるから手術するわ。」といつもと変わらない様子で母が話しだした。良性の腫瘍の可能性が高いから心配しなくていいことや、京都市内の専門の先生にお願いすることなど、一連の流れが伝えられた。突然のことに何も考えられず、言葉が出てこなかった。落ち着いてから頭を整理し、母に「何かできることはない。」と尋ねた。母は「しっかり食べて、寝て、いつもと変わらず、心も体も元気で過ごして。そして、退院の日に元気に迎えに来て。その日を楽しみに頑張ってくる。」と言った。母は入院日を決め、着々と準備していった。コロナ禍のため面会もできず、遠くの病院で、寂しくて怖くないのか尋ねた。手術を決心するまでは、怖かったらしい。しかし、決めてからは前向きに、やるべきことが見えてきて、楽になったそうだ。なにより、手術出来る段階で早く見つかり、上手な先生にお願いできて幸せだと、母は前向きにとらえていた。少し安心したけれど、まだ心配だった。

母がいない家の中は、いつもと雰囲気が違った。ご飯を作ってもらったり、何かをしてもらったりするのは当たり前で、母はいつも元気で、不死身のように思っていた。僕が元気に過ごすことが、母が一番望んでいることだと思った。心配だったけれど、僕からは電話しないと決めた。痛い時や辛い時に、無理して話させるのは嫌だったし、なにより心配性の母に、自分のことだけを考えてほしかった。父と役割を決め、出来ることは自分でするようにした。親戚にも助けてもらった。手術の日の夜、十時間かかり成功したと、父から連絡があった。二日後、母から電話があった。いつもと変わらない声を聞いて、初めて安心できた。それから二週間後母は退院した。そして、当たり前の日常が、戻ってきた。

この出来事から僕の考え方は変わった。意思を貫くことは大切だが、物事の背景や状況や、関わる人の思いを考えて、自分の役割を見抜き行動することを学んだ。そして、少し強くなれた。「人生何が起こるかわからない」経験して実感した。僕たちは一人で生きているのではなく、様々な人に助けられたり、導かれたりしながら生きている。当たり前と思っていることも、当たり前ではなく、平凡な日常が幸せだと気づいた。一日一日を大切に生きて、周りの人を大切にしたいと思った。それが、僕自身の力を蓄えることになり、強さとなる。まだ足りない力が沢山ある。知識、努力、忍耐、思いやり、決断力など沢山の力が必要だ。その蓄えた力を武器に、思いがけないことや大きな壁にぶつかった時、解決方法を考え、乗り越えていきたい。

これからの、僕の未来は誰も予想できない。楽しいこと以上に、辛いことや苦しいことがあるかもしれない。挫折も味わうだろう。落ち込むことや、逃げだしたいこともあるだろう。けれど、自分自身で、切り開く未来は最高だ。なぜなら、力をつけた自分自身で選ぶ道だから、失敗しても後悔はないはず。失敗もプラスに出来るはず。困難に遭遇した時に、どう行動できるかで、その人の価値がはかられるはずだ。「一日一日を大切にしなさい。毎日のわずかな差が人生にとって大きな差となって現れるのですから。」フランスの哲学者であり、数学者のルネ・デカルトの言葉だ。今日一日が最高の日になるように、ベストを尽くし、常に前向きに努力していきたい。未来に起きる、どんなことにでも立ち向かえる人になれるように。

第45回「少年の主張京都府大会」

講　評

皆さんは、府内各地から寄せられた多くの主張作文の中から、審査を経て今日の京都府大会の発表者に選ばれました。このことは、高く評価されることです。この舞台に立ったことに自信と誇りをもってください。

今日、多くの人の前で自己の主張を述べたことは、大変貴重な経験になったことと思います。また、他の人の発表を聴くことで多くのことを学ぶことができたと思います。皆さんの主張は、同じ年代の中学生のみならず、会場にいる全ての人にも感銘をうけるものでありました。

さて、今回応募してくれた皆さんの主張作文は、社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案、友達との関わり、家庭や学校生活のこと、社会の出来事に関することなど様々なテーマで中学生らしい視点や切り口で主張されている作品ばかりでした。今年度の応募された作品のテーマの特徴としては、昨年度は猛威をふるっていた新型コロナウイルス感染症についてのことや、またその影響による人間関係、絆についての主張が多かったように感じました。今年度は、友達、家庭、学校生活、思春期の心の葛藤といった普遍的なテーマの作品のほかに、社会の状況を反映した、環境のことやチャットＧＰＴなどの生成ＡＩやこれからの情報との向き合い方など未来に向けての主張が増えたように見られました。

中学生の時期というのは、自分の生き方や社会への関心が高まり、自分の考えとしてまとめ、提言や提案をしようとする意欲が高まり、そのあるべき姿を模索してくる時期でもあります。

どの作品もただ現状を伝えるだけではなく、現状をしっかりと考え、自分たちにできることや社会に向けての提言など、何を主張したいのかよくまとめられ、力強く未来を切り拓いていこうとする主張でした。

さらに、今日発表してくれた皆さんの主張を聞いて感じたのは、主張の内容においてのみならず、話す速さ、間のとり方や抑揚、顔の表情や身振りなど、聞く人に自分の訴えたいことを効果的に伝えるためのプレゼンテーション力が大変素晴らしいと思いました。

昨今、チャットＧＰＴなどの生成ＡＩが出てきていますが、このコンピュータ技術を使うことで何となく聞き心地の良い作文が作れるのですが、まだ現在の技術では、すでにある世界のビッグデータからしかものを作り出すことができず、今日の発表のような中学生らしい視点で、誰も発表していない新しいものを作ることはできないそうです。また、発表自体も相手を感じながら、間や抑揚をつけたりするなど、自分の主張を効果的に伝えることも現在の技術ではできないとも言われています。今日のように、会場にいる人たち感動を与えることができるのは、人にしかできないことです。まさに、今日発表してくれた皆さんにしかできないことです。

このことは、審査のポイントとしてでもあり、「中学生らしい感性で新鮮な主張であるか」、「新しい視点があるか」、「提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか」、「論旨が一貫し、構成がしっかりしているか」といった点や、「発表内容が共感と感銘を与えているか」、「説得力のある話し方であるか」、「話しぶりに熱意と迫力があるか」などについても見ていきました。

どの発表も素晴らしく、審査も難航しましたが、その中で、審査の結果、京都府知事賞を受賞された、相楽東部広域連合立笠置中学校のアブドゥル フセイン・ナジュマさん、本当におめでとうございます。

「おばあちゃんが教えてくれたこと」というテーマで、アフガニスタン紛争から武力的な行為で人が命を落とさなければならないことはおかしい。そんなことがない世界にするための一歩を考えていきたいという主張は、とても感銘を受け、我々も考えさせられる内容であり、素晴らしい発表でした。

また、各賞を受賞された皆さん、同じくおめでとうございます。

今日発表してくれた皆さんが、この貴重な経験を糧として、それぞれの学校、地域で今後ますます活躍されますことと、皆さんの意見や思いを、ぜひ、これからの社会をよりよくするための行動に結びつけていってほしいと、心より願っています。

会場にお集まりの保護者のみなさん、教育関係者やＰＴＡの皆様におかれましては、本日の発表の様子や一人一人の発表の良さをご家庭や学校、地域で共有していただければと思います。

最後になりましたが、本日しっかりと進行を進めてくれた二人の中学生と事務局の皆様、「少年の主張京都府大会」に関わってくださった皆様に感謝申し上げ、私の講評とさせていただきます。

京都府教育庁指導部学校教育課
総括指導主事　福田　昌弘

「少年の主張全国大会」
～わたしの主張２０２３～
内閣総理大臣賞受賞作文

私が歩む夢への道

鳥取県　米子市立東山中学校　三年
矢曳　未来

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、六年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のショックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近は怒りの気持ちより、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には二つ上の姉がいる。私は今、中学校三年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れたくなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいということを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るというのは、辛いことなのかもしれない。私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなった。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がるとき、事故に遭う前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。

そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけではなく、色々なことに挑戦させてもらえた。委員会活動や応援団に参加することができた。そしてこの三年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけではないということも知ることができた。

私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していきたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していきたい。

私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかった。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。

けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分はできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。

大会の模様を You Tube でご覧いただけます。

公益社団法人京都府青少年育成協会は、「京都府子育て環境日本一推進会議」に参画しています。

公益社団法人　京都府青少年育成協会

京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町 104 番地の 2　京都府庁西別館 3 階
TEL 075-417-0602　FAX 075-417-0603　e-mail kpyda@cello.ocn.ne.jp
URL　http://kyoto-seishonen.or.jp/